

大和国侍の事

一、添下郡の筒井順慶は、先祖は近衛家の末裔という言い伝えである。祖父を順政といひ、父を順興という。元は南都（興福寺）の衆徒の家柄であったという。順慶は才知にたけた人物で、武力をもつて大和国の半分以上を支配し、筒井に平城を築いて居城した。自ら所有する領地は六万石ほどであったが、大和国内には順慶の一族が大勢いた。応仁年中（一四六七〜一四六九）以来数度にわたり大和国は大乱状態となったが、順慶はあちこちで武功をあげて、ついに敵に屈することなく各勢力を統一した。

そのようなところ、松永久秀が筒井城を手に入れるべく大軍を法隆寺まで進めたため、順慶も筒井より二・二キロメートルほど西の梅檀木村というところまで出陣した。先陣の島清興（左近）・松倉重信の兩人に大和国の国侍が付き従って、並松というところに陣を張り、松永の軍勢と対峙した。戦闘がはじまって、松永の先陣が敗北した。それを順慶の先陣が追討した。

しかしあまりに深追いしたため、法隆寺のうちに隠し置いた松永の伏兵の奇襲を受けて、総崩れとなった。順慶の軍勢は混乱して筒井城へ入ることができず、そのまま東の山中の宇陀郡へ逃げ去った。そのころ宇陀城には秋山直国という人がいた。これも順慶に縁のある人で、順慶はこの城に滞在し、なんとか代々の領地である筒井庄へ帰ろうと策略を練っていた。松永も宇陀へ軍勢を差し向け一戦を交えようと計略をめぐらせていたが、その時は大和国の国侍は誰も松永に従わなかった。その上高取城には越智氏、十市城には十市遠長という順慶の一派が居城していた。この二つの城は道が細く険しい山にあり、また宇陀には番坂という山を切り開いて作った道が入り口にあったので、簡単に攻め入ることはできなかった。南都東大寺の少し北には小高い山があった。松永はその南の谷川を要害として、ここに多聞造りの城を築き、大和国を一度に平定するつもりであったが、国侍の多くはこれに従わなかった。

一方、順慶は辰市城主である井戸

良弘と手を組んだ。井戸は松永を討ち果たす心積りであった。松永は信貴山城しぎさんから一万余りの兵を出して辰市城を厳しく攻めた。井戸が城を堅固に守っているところに、順慶は宇陀郡より十市と越智の二人を引き連れて、山づたいに辰市の東の山に到着した。郡山城主や小泉城主など順慶の一門は皆ことごとく松永に敵対し、順慶の後援に回ったため、松永も辰市の城を捨てて家臣団を率いて戦った。井戸良弘も自身の軍勢を出して松永を攻めた。松永方への攻め手が多勢であったため、松永軍は南都に敗走し、筒井軍はさらに後を追って松永の家臣を攻撃した。松永軍は敗北し、多聞城たもんに戻り城への道筋を遮断した。すなわち、松永は南都の南の方角にある京終きょうはてという脇道へ退却し、町の入り口に火をつけて煙に紛れてようやく多聞城へ戻った。松永方の重臣は多数討ち死にした。

順慶は、このまま多聞城へ押し寄せて攻め入るように命令したが、家臣の島清興・松倉重信の意見は「今多聞城へ押し寄せたとしてもすぐには落城させることができず、そうなれば後々反撃にあうかもしれないので、まず城に入り暫く様子を見るのが良い」というもので、これに決した。そのことを織田信長に報告しようと、明智光秀の取りなしをもって伝えたところ、信長の返事は、「南東の古市城ふるいちを砦に定めて、多聞城を追撃するように」とのことであったが、結局合戦はなく足輕を出して戦うのみであった。松永は筒井城に置いていた見張りの軍勢を出陣させたものの、そのまま城を明け渡した。

順慶が密かに計略をめぐらし信長の臣下となったのを知り、松永久秀も信長に従うこととした。そのため、久秀は順慶と和睦し、多聞城は久秀の所有と決まり、久秀は信貴山城へ帰った。順慶も代々の本拠である筒井城へ入って、大和国の三分の二の国侍を配下に従え、信長へ臣従することとなった。

そうしたところ、松永は信長に対して謀叛むほんを企て、信貴山城に籠城した。そのため織田信忠を大将とする軍勢が信貴山城に押し寄せた。順慶も

これを好機として配下・一族を動員して松永征討に加わった。

順慶は古参の家臣の一人を松永に仕えさせていたので、その者に内通するよう密かに頼んだところ、承知したとのことであった。幸いなことに、大坂の本願寺に加勢を依頼するにあたり、松永はこの者を本願寺への使者に任命した。彼は順慶にその旨を伝えた。順慶は二百騎ほどの兵を大坂からの援軍を装って出立させ、河内国かわちの平野ひらのまで夜のうちに派兵しておいた。松永の使者（順慶の古参の家臣）は、本願寺からの帰還の際、平野に待機させておいた軍勢を従えて信貴山城内へ夜のうちに潜入させた。そうして、信忠の軍勢が夜半過ぎから総攻撃を仕掛け、信貴山城に密かに配置した部隊も城に火をつけ、裏切った。その結果、松永父子（久秀・久通）は天守閣へ上り切腹した。子息松永久通は南都の多聞城へ落ち延びて自害したとも、また父母と一緒に自害したともいわれている。

これ以後、大和国の国侍はことごとく筒井順慶に臣従し、順慶の国内統一が進んだ。順慶は天正十一年（一五八三）五月に病死した。その後筒井家は伊賀国いがへの転封ぼほう（領地替え）を豊臣秀吉より命じられ、上野城に居城した。関ヶ原の戦の三年後、中坊秀祐なかのぼうという筒井家の重臣が、幕府に筒井定次の不行跡を訴えたところ、定次は多くの悪事を働いた咎で切腹させられ、伊賀の所領を没収された。

筒井氏の配下の武将は五十騎であった。